

会 議 録

会議名	令和5年度第1回山形市救急救命業務検証会議
開催日時	令和5年8月24日(木) 13時30分から15時00分
開催場所	山形市西消防署多目的ホール
主催	山形市消防本部
出席者 (敬称略)	・構成員(8名) (五十音順)後藤道子、橘拓、野口比呂美、廣部公子、藤澤睦夫、細谷真紀子、三浦秀隆、森野一真、渡辺英一 ※金谷透(欠席) ・山形市(7名) 市長、消防長、通信指令課長、救急救命課長、通信指令課総括主幹、通信指令課長補佐、救急救命課長補佐
傍聴者	・なし
検証事項	■映像通報システム(Live119)について(通信指令課) ■プレアライバルコールについて(救急救命課)
報告事項	■口頭指導について(通信指令課)
座長(敬称略)	森野 一真
資料	配布資料参照
作成者	山形市消防本部 通信指令課長補佐 高橋 靖幸

■市長あいさつ

市 長

みなさんこんにちは。本日は大変お忙しい中、「山形市救急業務検証会議」にご出席を賜りまして、ありがとうございます。今回から新たにメンバーに加わっていただきました皆様を始め、今後とも山形市の救急救命体制の強化にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

さて、前回の検証会議におきましては、豊中市消防局との人事交流研修を通じて応急手当普及啓発活動の課題と今後のあり方のほか、119番通報の聴取等に関する個別評価について、検証していただきました。

皆様からいただきましたご意見を踏まえ、業務見直しや職員の技術向上に取り組んでいるところであります。

本日の会議では、高機能消防指令センターに新たに導入されました映像通報システムでありますLive119のほか、救急隊員が現場に向かいながら通報者や関係者等に電話連絡し、現場到着前から情報収集を開始するプレアライバルコールについて検証していただきたいと思っております。

今後とも、いただいたご意見をしっかりと活かしながら、救急体制の整備に万全を期してまいりますので、皆様それぞれのお立場で、忌憚のないご意見を賜りますようお願い申し上げます。挨拶といたします。

本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

■座長選出

森野 一真 山形県立河北病院 病院長

■検証事項

1 映像通報システム（Live119）について（通信指令課担当：渡邊通信指令課長説明）

※【会議資料1】により説明

《構成員からの質問・意見等》

構成員

Live119については、なんとなくは理解できるが、高齢者がSMS（ショートメッセージサービス）を使用するのは難しいので、高齢者もLive119を利用しやすいように進めるためにはどのように考えているのか。

山形市

Live119については、消防救急活動の補足として使用するものであり、必ず使用するものではない。119番通報があった際は言葉で状況をお聞きしながら対応していくのは、これまでと変わらないと考える。

構成員

Live119について、講習会開催の考えはないか。

山形市

Live119の講習会の開催については、講習会の規模や参加者数も現時点では不明ですので、開催できるか調査しながら検討していきたいと考える。

構成員

会議資料1の5留意事項（1）に「通報者が第三者であり、撮影行為が現場でのトラブルに繋がるおそれがある場合については使用しない」とあるが、どのような場合を想定しているのか。

山形市

他人が動画を撮影する行為について記載したものである。通常家族であれば現場の動画を撮影する分には個人情報には該当しないと思われるが、通報者が第三者である他人であって撮影している姿自体が周囲の人から誤解される可能性がある場合や、撮影行為が現場でのトラブルに繋がる恐れがあると指令員が判断した場合で、不特定多数がいる事故等を想定している。例えば急病人が発生して、家族が撮影する分には個人情報に該当しないと考える。

構成員

個人情報について難しいということは分かりましたけれども、家族が自分の家族を撮影する分には問題はないが、第三者が撮影者となった場合は色々と問題があるという認識でよいか。

山形市

そのとおりである。

構成員

新しいことを取り入れていることについて感謝している。ただ運用するにあたっては、皆様にお知らせすることと、それが日常化するまで時間がかかると思う。高齢者のほとんどはスマートフォンを所持しているが、実際に使い切れていないというのが現実だと思うので、高齢者向けの

講習会等も開催していただきたい。

また、Live119のチラシについては、どのような場所に置いたり配布したりしているのか。どのような広報をしているのか。

山形市

Live119のチラシについては、現在のところ市内の公民館、コミュニティセンターに配布し掲示を依頼している。また、ホームページにも掲載している。

構成員

市内の公民館、コミュニティセンターでは目にする機会が少ないと思われるので、町内会回覧や日常的に目に触れるような場所にLive119のチラシを活用いただきたい。また、高齢者も大概スマートフォンを所持しているので、スマートフォンの使用の一環として、色々な場所で講習会の開催を考えたらより普及ができると思う。

山形市

参考とさせていただく。

構成員

撮影者の端末にLive119の映像が残るのか。

山形市

撮影者の端末にLive119の映像が残ることはない。

構成員

会議資料1の5留意事項(1)中の「通報者が第三者であり、撮影行為が現場でのトラブルに繋がるおそれのある場合については使用しない」というところの追加質問ですが、他人が撮影する行為はなかなか難しいという配慮は理解でき、このような現場は不特定多数の現場と受け取った。例えば学校や老人クラブなどの特定できる多数の現場での撮影については第三者に該当するのか。

山形市

想定しているのは、不特定多数のいる場で口頭指導が伴うような事例があった場合であるため、まずは聴き取りの中で通報者が誰なのか関係性を確認する。家族、親族以外であれば状況により中止する場合がある。撮影行為が現場でのトラブルに繋がるおそれのないと指令員が判断した場合は、動画撮影に移行すると考える。また、通報者の撮影行為が現場での状況によりトラブルに繋がるおそれがあると通信指令課員が判断した場合は撮影を中止するという判断もあり得ると考える。

構成員

通報者の二次的被害を防止する意味合いが大きいと受け取ったが、熱中症で児童が倒れたり、水難事故であったり、先生がそれを伝える場合などでは有効な方法ではないかと感じた。

第三者の取り扱いについては、豊中市などの事例も参考にして、柔軟に対応できるよう希望している。

会議資料1の7記録簿等の中で1年間保存となっているが、なぜ1年間保存なのか。

山形市

保存した映像についての保存年限の規定がないので、市の文書規定の文書扱いに沿って1年と定めた。

構成員

会議資料1-2のフロー図中に「状況を確認したいので」との文言があるが、通信指令課員から依頼する文言で間違いはないか。

山形市

そのとおり。指令員が言葉だけでは状況が分からないと判断した場合、指令員から状況を確認したいという意味のもと依頼する。

構成員

動画の中で「それでは倒れている方を撮影しましょう」という言葉があったが、家族や身内を想定するにあたり、もう少し適切な言葉がないのかと感じた。軽率な言葉ではないが、軽率にとられたらどうするかと感じた。

最後に、Live119の映像を出動隊と共有しているのか。

山形市

当市で使用しているLive119の映像については、1事案に対して2台まで送信することが可能であり、1つが指令センターのパソコンに画像として送信され、もう1台にも送信することが可能である。

座長

仙台市消防局ではLive119は導入しているのか。

構成員

本市においても試行運用を令和5年2月から実施しており、試行運用期間の課題等を踏まえて令和5年4月1日から運用を開始している。実績については、試行運用期間を含めて77件利用を依頼し、活用できたのが50件である。状況確認においては大変有効と感じる。また、大きなトラブル等は発生していない。

座長

非常に有効なシステムだと思うので、運用の結果についてご報告願いたい。

2 プレアライバルコールの実施について（救急救命課担当：武田救急救命課長説明）

※【会議資料2】により説明

《構成員からの質問・意見等》

座長

確認事項、図3の病院連絡開始までの所要時間は、プレアライバルコールを実施した79件の平均でよろしいか。

山形市

その通り。

構成員

救急隊別プレアライバルコール実施率の差に、救急隊員毎のプレアライバルコールの習熟度が影響していると考えられるとあるが、実際に評価をしているのか、また評価する場合どのようなものを使用し評価しているのか。

山形市

習熟度に関しては、今回のプレアライバルコール実施以前から、個人的にプレアライバルコールを実施していた救急救命士は、ある程度慣れた状態で開始することができたが、プレアライバルコールを実施したことのない救急救命士は要領等に不慣れなところがあり、その習熟度の差が実施率に影響したものと考えている。

現在、習熟度を確認する評価票等は作成していないが、今後は習熟度の評価についても検討していきたい。

構成員

資料に奏功事例が記載してあり、奏功事例を積み重ね情報共有し学び合いを行うことで人材育成になるので、奏功事例を今後も積み重ねて欲しい。

山形市

7月に検証期間が終了し検証結果を分析したところ、プレアライバルコールは効果的であることが確認でき、また奏功事例等もあったことから、8月に救急救命課から各署の救急隊へ、プレアライバルコールの積極的な実施について依頼を行い、奏功事例についても救急隊員で情報共有できるようにしている。

構成員

救急隊員の労働環境はかなりきつい形と思うが、実際に救急隊員の方から「きつい」という感想などはあるのか。また、緊張の度合いがより強い形でストレスとなることはどのようにお考えか。

山形市

検証期間中に一度もプレアライバルコールを実施しなかった救急隊長が4人おり、個別に聴き取りを行ったところ「通信指令課員からの情報で十分」との判断や、現場到着までの時間を救急活動のプランを立てることに使っている等の回答があった。構成員からご指摘のあった緊張感によるストレスについては、プレアライバルコールで通報者又は関係者に電話がつながった時点で、その緊張感の継続は救急隊員のストレスになることもあると思うが、それらを含め傷病者の救護を最優先として救急業務にあたっている。なお、プレアライバルコールの実施に関しては、後部席に乗車する救急隊員がプレアライバルコールを実施することとし、救急隊長は、助手席に乗車し現場までの安全管理を機関員と共に実施することとしている。もし習熟度に差があり、救急隊長がプレアライバルコールを実施する場合は、救急隊長が後部席に乗車しプレアライバルコールを実施し、隊員を助手席に乗車させるというルールにしている。

構成員

プレアライバルコールの目的として、救急搬送困難事案の解消が大きな目的であると思うが、この救急搬送困難事案は新型コロナウイルスの影響と説明があり、搬送先病院が決定しない現場滞在時間でプレアライバルコールを実施し聴取するという考えでよろしいか。

山形市

病院への複数回の照会については、病院側の受け入れ体制の問題であり救急隊は受入れる病院が決定するまで電話連絡を続けるしかない。このプレアライバルコールに関しては、現場で病院へ電話連絡をするまでに要していた時間をより短縮し、現場滞在時間をトータル的により短縮しようと取り組んだものである。

構成員

プレアライバルコール実施後の救急搬送困難事案件数と救急隊の平均現場滞在時間の推移が6月から7月にかけて増加した要因はどのように考えるか。

山形市

6月、7月についてはプレアライバルコールを実施したことで現場滞在時間の短縮には効果がみられたが、依然として病院の受け入れ体制の問題から、傷病者受入れ照会回数の複数化がみられ、トータル的な現場滞在時間の短縮とはならず、結果として救急搬送困難事案の解消には至らなかったと分析している。

救急搬送困難事案の定義は、病院の紹介回数が4回以上かつ現場滞在時間が30分以上の事案とされているが、救急隊の努力で短縮できる部分として現場滞在時間に着目し、病院連絡開始までの時間をプレアライバルコールの活用で短縮することで、救急搬送困難事案を解消するよう取り組んだものである。

座長

現場滞在を短くするために努力する方法として、救急隊が現場に到着してから病院に連絡するまでの時間を短くする、病院に連絡してから病院が決まるまでの時間を短くする、という2つの方法がある。救急隊が短くできるのは前段の部分で、プレアライバルコールによって短縮はできたが、後段の部分は短くできない、あるいは更に延長してしまったという結果として、6月から7月にかけて延長してしまった。搬送困難事案についての現場滞在時間短縮は消防だけの努力だけでなく、医療機関側の努力も必要という結果である。

構成員

病院側の事情でいうと、ここにきてコロナが増えているという状況があると思うが、そういったものは関係しているか。

山形市

7月から8月にかけては非常に救急出動件数が増加している。傷病者が増えたことで、受入れる病院側でも傷病者を受入れたいが、初療室のベッドが他の救急患者で満床となり、どうしても受け入れられないという状況や、入院が必要な傷病者では入院ベッドが確保できない等の理由で、受入困難と回答される状況が多く、救急隊は受入れ可能な病院が決定するまで対応可能な病院に電話をし続けるという現状である。

構成員

その理由がコロナとか熱中症とかあると思うが、具体的な要素が言える部分はあるか。

山形市

救急隊は「山形県傷病者搬送受入実施基準」に基づき、傷病者の症状に見合う受入れ病院リストの中から適切な病院を選んで受入れ要請している。

病院の受入れ困難理由等から、コロナや熱中症がどのように関係しているのかはわからないため、一概に救急隊員が言える状況ではない。

座長

コロナが原因でというだけではない。搬送困難事案というのは、新型コロナウイルス感染症の蔓延以前からある問題で、それに新型コロナウイルス感染症が被さってきたので複雑化している

状況となっている。

構成員

蔵王で展開した事業で、体調不良の子供がおり、救急車を要請した際、救急隊員から連絡があった事案を体験し、保護者も安心していただけました。プレアライバルコール運用上を増やす、活用することが大事になるのではないかと考えている。

構成員

通信指令との関わりで、119番受信とプレアライバルコールの干渉はしないのか。指令員の指令情報で十分という救急隊もいたが、Live119の映像を救急隊と共有できないのか。

山形市

プレアライバルコールの実施に関するルールとして、Live119を活用している事案についてはプレアライバルコールを実施しないというルールを作っていたが、Live119でもう1系列の送信が可能で救急隊へ画像を送信することができれば、救急隊が画像から得られる情報は非常に大きく、プレアライバルコールがより効果的となるため、この件に関しては今後新たな取り組みとして検討していきたい。

通信指令員からの支援情報で十分であるとする救急隊長がいるが、現場へ到着すれば関係者等から更に詳細な情報を聴取しているわけであり、それが結果的に現場滞在時間の延長に繋がるため、その詳細情報をプレアライバルコールで聴取するよう指導している。今後プレアライバルコールの実施率は向上するものと考えている。

構成員

通信指令からみてプレアライバルコールの取り組みはどのように見えているか。

山形市

通信指令課でも119番受信から出動までのプロトコルを作成しており指令課員全員が同じ聴取が可能となるよう、5W1Hを基本として聴取をしている。救急に関する知識については毎月研修会を開催したり、OJTなどでも救急救命士が指導しており、その知識を基に支援情報として反映している。救急隊からプレアライバルコールをすれば、傷病者側からとすれば救急車が向かってきてくれているという安心感があるが、指令員が情報を聴取する場合、聴取する情報量が増加するほど救急車はまだかという苛立ちや感情的な変化があるため、その感情をくみ取り情報聴取途中で電話を切断する方法も取っている。プレアライバルコールの取り組みは全体的にスムーズな活動に繋がるのではないかと考える。

山形市

通信指令員が必要と考える情報と救急救命士が必要と考える情報には差がある。救急救命士が必要とする情報を通信指令員が聴取し支援情報として救急隊へ提供することは、非常に高度な知識を必要とするため、救急救命士が自分で必要とする情報を自分で取りに行くということが、今回のプレアライバルコールを実施することとした背景の一つとなっており、更に磨いていきたい。

座長

プレアライバルコールにLive119を取り入れている消防はあるか。豊中市消防局はどうか。

山形市

Live119を救急隊が共有する取り組みは行われていなかった。豊中市消防局は山形市消

防本部の管轄面積の約1/10狭い面積に人口約40万人が居住しており、救急車が現場へ短時間で到着するため、Live119が消防指令センターと救急隊で共有できるかという点、今後検討していく必要があると思う。

■報告事項

1 口頭指導について（通信指令課担当：渡邊通信指令課長説明）

※【会議資料3】により説明

《構成員からの質問・意見等》

構成員

応急手当指導員や応急手当普及員が、この数字を理解して自分たちが実施する指導に含めていければよいと思った。

座長

山形県でも、このようなデータを取っており、胸骨圧迫の深さが足りないということで、山形市と同じ結果となっている。指導するときに留意していただきたい。

構成員

実際に口頭指導を受けながら心肺蘇生法を実施して下さっている年代は、若い方が多いのか。そのデータはないか。

山形市

実施者の関係性の統計は取っている、心肺蘇生法を実施される7割8割の方が75歳以上の後期高齢者で、通報者はその妻であったり家族ということが多い。

座長

県の結果も、講習会の受講者の方が適切な応急処置ができているという結果が出ている。是非講習会への参加を促していただきたい。

■次回開催について（武田救急救命課長）

令和5年度の第2回山形市救急救命業務検証会議は3月に開催を予定している。

■閉会